

雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

生物多様性のこと(2)

(本稿執筆中の背後意識:地球環境問題)

生物多様性を保つために、前号では「生物は全て生きる権利を常に等しく持っていて、人間も生物の一種である」とした。これで、全ての生物の生存権を均等に認めたことになる。今号では「ある生物が他の生物を殺すのは自己の生命や種族の維持、危害の防止のために限られるべきである」とする。実際には殺さずに栄養を取っていることも多い。人間にも当てはまるが、人間が他の生物を殺す事情は、他の生物が別の生物を殺す事情と大きく違う。もやはり全ての生物の生存権を認めている。地球に住む資格のある生物は人間だけであると考えるのは誤りで、全生物が等しく資格があると考え。地球は全ての生物の住み処である。

人間の食糧は殆ど全て生物であると言ってよい。人間の飲食物で生物でないものは水と塩ぐらいのもので、人間は他の生物がいなければ生きることができない。他の動物も別の生物がいなければ生きて行けない。植物は殆ど地中、水中、空中から栄養をとるが、他の生物からとる例も、少ないがある。

生物は他の生物に襲われ、あるいは食われることが宿命となっている。一番悲惨に見えるのは、生きのまま直接食べ殺されることである。致命的でないにしても、他の生物に“やられる”危険は常にある。人間も変わらない。

多くの生物は食いつ食われつの関係にある。この関係は一方的であり、双方向的ではない。闘い合う関係ではない。猫は鼠を食うが、鼠が猫を食うことはない。鼠は猫を敵とするが、猫は鼠を敵とはしない。大型の猫といえる虎は他の動物を捕らえて食うが、虎を捕らえて食う動物はいない。野生の猫や虎などは死骸となってから他の生物(微生物を含む)に食われる。植物の栄養にもなる。人間も同じだが、近代化が進んだ所では焼かれて灰になる。

食われる生物は別の生物を食う。別の生物はまた他の生物を食う。この繋がりが系統的に見られる生物群もあり、その状況を食物連鎖と言っている。

生物多様性の維持は人間にとって望ましいと考える。花園に蝶が舞い、森林に鳥や獣が棲み、珊瑚礁に魚が群れ、地球は生物の楽園に見える。全ての種が仲良く生きていけるならよいが、現実はとてもそうはいかない。熾烈な食いつ食われつの世界となっている。その中で生物の生命は全体として繋がり、循環している。

生物は食いつ食われつで、食われる側は減る。鼠は猫などに食われ、その分減るが、鼠が絶滅することはない。抜群の繁殖力を持ち、他の生物によって減らされる分を補って余りある。鼠は身を犠牲にして猫などを養っていると言える。一般に、食われる生物は、食われることによって食う側を養っていると言える。誕生が喜びであり、死が悲しみであるという次元ではない。これが生態系の実態である。

生物は食いつ食われつだが、食われる側は食われまいとして防衛する。鼠は猫に捕まったら抵抗の術はない。猫の首に鈴をつければ、猫が近づいたことが分かり、鼠は早く避難できて助かる、という童話は、人間が鼠の心境を代弁している。生物は他の生物に襲われて抵抗の術なく食われることもあるし、防御して相手を遠ざけて身を守るか、逃げるか、あるいは別の方法で生命や種族を護っている。人間の場合も、害を及ぼす生物に対しては退治する、遠ざける、逃げるなどの対策を取っている。ある種の病原菌に対しては、免疫力をつけて発病を防ぐ方法も見出した。

生物、特に多くの動物は自己の生命維持のために他の生物を殺しているが、人間は必ずしも自己の生命維持とは関係なく他の生物を殺すことがある。私が釣り趣味の友人に、魚の命のことを話したら「君は私の楽しみを奪うのか」と非難された。釣り場などのある種の魚は養殖され、放たれ、釣り人を待っているという。釣りは産業となっている。釣った魚が人間の栄養になるわけでもなく、水槽で活かされ

るわけでもなく、ただ釣り人の楽しみのために、、、となれば前記の には該当しない。

人間が他の生物を、食用ではなく、商業目的でもなく大量に減少させている例がある。捕まえて殺すのではない。殺す意図もない。開発のために生物の生存圏を奪うことによって、その生物が死に、繁殖の機会が失われる事態である。どんな生物も生きる場所や繁殖の場所が必要である。森林を伐採すると、植物のみならずそこに住む動物も住み処と食糧を失い、滅びる。地表の鉱山についても同じことが言える。個人の趣味の釣りなどは規模が違う。全地球的な問題である。近年は生物多様性維持の観点からの配慮の例もみられるが、少ない。開発が人間に利便をもたらすのと、生物多様性の低下とが引き替えになっている。

人間は生きるために衣食住を必要とする。そのため人間は食のためだけでなく衣や住のためにも他の生物を殺している。豊かな人間は“楽”を加えて衣食住楽を謳歌している。他の動物も衣食住は必要だが、衣は先天的に備わっていて、寒暖に対応し“薄着、厚着”の切り替えが巧みになされている。そのため他の動物は「食住」で生きている。この点、人間と違う。他の動物の「住」は住み処であり、構築物(巣)を持つ生物もいる。

生物には寿命がある。寿命とは生まれてから死ぬまでの期間の長さをいう。生物は他の生物に殺されたり、病気、怪我、事故などで命を落とす場合もある。寿命は種によって異なり、同じ種でも個体によって差がある。動物と植物のどちらが寿命が長いかといえば、記録的には植物の方であろう。千年を越えるものがある。生物は命のある間に子を残す。生物多様性を考える場合に、生物の世代継承は重要な意味を持つ。

自然は“自然に”変化するから逆らわず、人間は手をつけない方がよいとする考え方もある。鬱蒼と茂る森林は、地球環境にとって好ましい。しかし手を着けずに置けばどうなるか。樹木には寿命があり、やがては枯れる。一斉に育った木はほぼ一斉に枯れ、そこは荒廃するが、やがて甦生して鬱蒼とした森林に戻ると聞く。原始林は繁栄と衰退を繰り返す。樹木の寿命は長いから、盛衰の波を数百年としても、人間の寿命より遥かに長い。放置した場合、荒廃の時期に生きる人間は豊かな緑を見ることはできない。いつの世も緑豊かな森林であるためには、人間は常に森林に手を加えなければならない。この例のみならず、生物多様性を護るためには、人間は自然を放置せず、他の生物の生き方に介入せざるをえない。

生物は他の生物に食われなくても寿命が来ると死ぬ。地球に生物が誕生してから生きた生物の数は膨大で計り知れないが、その数は死んだ数と等しい筈である。仮に食い殺された生物の数を差し引いても、生物の死骸がそのまま残れば、地球を厚く埋め尽くすであろう。ところが、生物の死骸はめったに見当たらない。死骸は生きている生物の栄養となって、姿を変えているのである。大型動物である鯨の死骸は海底に沈み、他の生物の食糧になっている。鯨は他の生物を養っている。死骸を食われることは無害、有益で、自然はよくできている。

種は食いつ食われつの関係にあると同時に互惠関係にある。生きて食われる側は好んで食われる訳ではないが、食われることによって食う側を養っている。これが自然の定めである。死骸が他の生物に食われるのは互惠関係の一つと言える。

より明瞭な互惠関係は、排泄物が他の生物の食料となっていることである。生物は体外から栄養や活動源を取り込み、不要物を体外に排泄している。それが正に“生活”である。摂取と排泄は等価・同次元である。人間は食べ物を美、自己の排泄物を醜と位置づけているが、人間としてはそれでよい。しかし生物全体からみれば、ある生物の排泄物は他の生物の貴重な栄養源となっている。美醜が両立している。植物にとって動物の排泄物のご馳走と言えよう。葉は動物の吐息や人間の活動から生じた炭酸ガスを取り込み、酸素を排泄している。生態系はよくできている。生物が多様であるほど効率がよいであろう。

多様な生物の世界は、食いつ食われつの関係と互惠関係からなっている。矛盾か調和かの一言で言い切れるものではなく、両者は併存のまま太古の昔から続いている。これが自然の節理というものであろう。今、世界を眺めると、地球が人類だけのものになりつつある感じがする。食いつ食われつの争いは人間同士でなされ、止むことを知らない。少なからぬ人々が明日の食事に困り、地球環境問題など考える余裕はない、と叫ぶ声が聞こえてくるような気がする。